

愛と自己犠牲： 星の王子さまの死の意味について¹ 第一部

眞 柳 麻 美

Love and Sacrifice : The Meaning of Death in *Le Petit Prince*

MAYANAGI Mami

はじめに

星の王子さまは自分の故郷である惑星を出発し、長い旅の後にたどりついた地球のサハラ砂漠で、謎めいた事ばかりを言う蛇の毒によって倒れてしまいます。アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリは、あの高貴な王子さまは愛する花の世話をするために自分の星に帰ったのかもしれないといってこの結末にあいまいさを残してはいますが、王子さまの死によって迎えるこの結末は、読者に大きな悲しみと不安感を残すものだと思います。なぜ王子さまは死ななければならなかったのでしょうか。この死にはどんな意味があるのでしょうか。この問いにはいくつもの答え方があると思います。サン＝テグジュペリの子供時代に彼の小さな弟が早すぎる死を迎えたことと関連づけて、精神分析的に意味のある解答を導き出すこともできるかもしれません。あるいは厳しい現実社会に適応するために、自分自身の穢れのない内的自己 (inner self) が殺されてしまったとサン＝テグジュペリは感じていたのかもしれません。この解釈は、サン＝テグジュペリが『パリ＝ソワール』紙のために書いたルポルタージュの中に著されている「虐殺されたモーツァルト」の逸話からも読み取ることができると思います²。このような解釈に関しては、*Discovering the Royal Child Within* の中で Eugen Drewermann が、フロイトの精神分析学を応用して王子さまの死の意味を以下のように論じています。

¹ 本稿は、英語で執筆した論文の和訳に加筆、修正を加えたものである。英文オリジナル原稿に関しては、アレーティア文学研究会出版「アレーティア」17号-19号を参照のこと

² Antoine de Saint-Exupéry, *Un Sens à La Vie* (Paris, Gallimard, 1956), 「人生に意味を」(訳：渡辺一民), 42-43. この逸話の解釈については、本稿のセクションⅢで言及する。

The high-flying “Icarus” has crashed, and he meets his alter ego in the figure of a youngster. But the flyer – the writer’s own ego – never changes his plans and goals after meeting the Little Prince. On the contrary, he keeps working away, repairing his engine. And at the very moment that he gets the job done the Little Prince dies.³

(訳) 空高く舞い上がるイカロスは墜落し、彼はその子供の中に見出される彼自身の自我 (alter ego) と出会います。しかしこの飛行士 (作家自身の自我) は、王子さまと出会った後も自分の計画と目標を変更することは決してありません。それどころか彼は仕事を続け、エンジンを修復し続けるのです。そして彼がその仕事を終えるやいなや、小さな王子さまは死ぬのです。

またDrewermannは、王子さまは愛する薔薇のために死んだのであるが、その薔薇はサン＝テグジュペリの母親が投影されたものであると考えています⁴。エディプスコンプレックス理論を使ったこのような解釈は確かに興味深く、それなりの意義もあります。しかし前述の問題に答えるためには、精神分析的な理論付けを越えるものが必要であると思います。なぜならサン＝テグジュペリ自身がフロイトの精神分析を大いなる知的好奇心をもって学んだ後に、結局はそれを批判していたからです。実際にはサルトルのようなサン＝テグジュペリの同世代のフランスのインテリたちも同様に、フロイトの理論を批判していました⁵。またフロイトの理論を使用して夢のようなおとぎばなしの中に表れる作家の無意識を解明することも興味深くはありますが、作家の「意識的な」意図を理解しようと試みることの意義を否定することはできないと思います。実際に王子さまの死によってこの物語を終わらせることに、サン＝テグジュペリは固執していたようです。この結末に関してサン＝テグジュペリが出版社と対立したといういきさつから、それを伺い知ることができると思います。出版社側がこの結末を変更するようにサン＝テグジュペリに提案したため、サン＝テグジュペリは、“children accept all natural things, ...whereas adults distort the natural (大人は自然なもののゆがめてしまうが、子供は自然なことはすべてそのまま受けとめることができるものです)”⁶ ということを出版社が理解するように説得しなければならませんでした。結局は出版社の心配は杞憂に終わり、「星の王子さま」の出版は大成功をおさめました。

しかし作家自身は、この物語の出版が大成功をおさめたという事実を知ることはありません

³ Drewermann, Eugen, *Discovering the Royal Child Within – A Spiritual Psychology of The Little Prince* (New York, Crossroad, 1993), translated by Peter Heinegg, 73

⁴ Drewermann, 77

⁵ See Beynon-John, S., “A Note on Saint-Exupéry and Freud,” *French Studies Bulletin: A Quarterly Supplement* (England, 1999 Autumn, vol. 72). See also Schilpp, Paul Arthur (Ed.), *The Philosophy of Jean-Paul Sartre* (La Salle, Open Court, 1981)

⁶ Andrew Casper, Joseph, *I Never Met a Rose: Stanley Donen and The Little Prince*, in *Children’s Novels and the Movies*, (New York, F: Ungar, c1983), 145

んでした。王子さまの死によって終わる「星の王子さま」の執筆を終えたすぐ後の1944年7月に、作家自身の死も訪れたのです。サン＝テグジュペリは軍の偵察機での飛行中にナチスに撃墜されたと言われています。近年、海中から彼の遺品が拾得されましたが、遺体は未だ見つかっていません。読者によっては、物語の中の王子さまの死とほとんど同時に起きた、現実におけるこの作家の死を偶然とは思えないのではないのでしょうか。そしてまた、この出来事と作家自身の死とを関連づけて王子さまの死の意味を知りたいと思う読者もいることだと思います。単に悲劇的な結末が読者の心を打つのだというだけではなく、それ以上のものがこの物語に含まれているということを理解することによって、より深くこの物語の価値を認識することができるようになると思います。James E. Higgins も、*The Little Prince – A Reverie of Substance* の中で以下のように言っています。

The Little Prince is not an attempt to supplant the child's fear of death. Neither is it a sermon exhorting boys and girls to be good because of the rewards and punishments of an afterlife. It is, rather, an expression of Saint-Exupéry's firm conviction that life, as we come to know it, has meaning only because of death, and that the two are one. He assumes both that this is a major concern for children and that they are capable of understanding it in their own way.⁷

(訳)「星の王子さま」は、子供の死に対する恐怖心を取り除こうとしているわけではありません。また死後に与えられる褒美や罰のことを考えて、男の子や女の子に良い子供になるようにと促しているというわけでもありません。むしろこれは、私たち人間がだんだんと分かってくるように、人の生とは、死と対比して考えることによってのみ意味をなすものであり、また生と死は一对のものであるというサン＝テグジュペリの確信が表現されたものなのです。サン＝テグジュペリは、このことが子供たちにとって大きな関心事であるということと、子供たちは自分たちなりにこのことを理解することができるものだと考えているのです。

「星の王子さま」の結末に関する上記のようなHigginsの議論によって、読者たちには、死が人間の生の不可分な部分であるということをサン＝テグジュペリが考えており、その思想がこの物語に反映されているということを理解していただけたと思います。しかし読者が「星の王子さま」を十分に理解するためには、人間の生の世界においてその死が何を象徴しているのかということを探究することがより重要になると思います。

では、どのようにしてこの作家が「星の王子さま」の死に込めた象徴的な意味を探ることができるのでしょうか。それはサン＝テグジュペリが作家・飛行士として社会に対する批判的な目を持って著した随筆の中に表れる彼自身の言葉から伺い知ることができると思います。

⁷ Higgins, James E., *The Little Prince – A Reverie of Substance* (New York, Twayne, 1996), 86

従って、サン＝テグジュペリの本を引用しながら王子さまの死の意味を解明し、証明していくことができると思います。しかしこの問題に直接答える前に、以下の議論においてはまず、「星の王子さま」における「子供」がどのような機能を果たしているかということを示したいと思います。私は「子供」によって語られる言葉は、作家自身の考えや言葉を代弁しているのだと思います。つまり作家の視点を子供の視点と一致させることによってサン＝テグジュペリは、「子供」のその澄んだ瞳による穢れのない視点が社会の邪悪さを暴き出すのだということを読者に語りかけているのだと思います。18世紀にルソーは、人は自然の状態では無垢であるのだが、文明化された社会の中で腐敗されてしまうと考えていました。それと同じようにサン＝テグジュペリは、まだ社会に毒されていない子供は無垢であると考えています。そしてこのような無垢な子供たちだけが、その純粋さによって社会悪を非難する資格を持っているのです。「星の王子さま」においては、王子さまや飛行士の中に残されている子供の部分を通して、作家の批判的な視点が著述されていると言えます。本稿においては、どのようにサン＝テグジュペリが彼の生きた社会を批判しているかということについても言及していきたいと思います。また、様々な社会悪のすべては、ある規範が欠如しているということに帰結されるとサン＝テグジュペリは考えている様です。その規範とは、責任感という概念です。サン＝テグジュペリは、人間の持つ責任感が社会に存在する問題を解決する手段になりうることを提案しています。そして最も過酷な環境においては、責任感は極端な形をとらなければなりません。そして責任を担うためには、人間は自分の体と命は自らに属するのではなく、他者のためにあるのだということを認識しなければなりません。結果として、人の責任感が自己犠牲と同義語になるのです。人間は死んで永遠になることによって、社会の悪を根絶するための責任を遂行できるとサン＝テグジュペリは考えています。これは西洋文学の思想の原点であるキリスト教において、イエス・キリストが人間の罪を贖うために自らが犠牲となったことと重ねてみることができます。サン＝テグジュペリがこのような思想的背景を持っていたということは、彼がカトリックを国教とするフランスの作家であるということを考えれば当然のことであると思います。また、彼が貴族であるという事実からもサン＝テグジュペリが自己犠牲の精神を持っていたということが納得できると思います。それはフランス語にあるノブレス・オブリッジ (Noblesse Oblige) という概念から説明がつくと思いますが、これは、社会的地位の高い階層の人たちが当然負うべき社会的義務という意味なのです。

しかし王子さまの死には、責任感による自己犠牲の死という意味のほかにもう一つの意味が含まれています。それは、社会の力学によって弱者たちが死に追いやられてしまうということです。戦時のように社会環境が最悪の状態に陥ったとき、社会の邪悪さによって人々は死ぬことを余儀なくされます。そのような中では、罪のない子供たちやそのほかの社会悪に染まることを知らない「弱い」人々が死ぬことを余儀なくされるのです。星の王子さまは、一匹の毒蛇のひと噛みによって殺されます。小さな惑星からやってきたその罪のない無垢で小さな子供は、この穢れた世界に自らの居場所を決して見つけることができないのです。そこ

で王子さまは、愛する薔薇の世話をするという責任を担うために、自分の惑星に帰っていくことを選ぶのです。ここで、王子さまの死は二重の意味を持つことになります。それは、彼が責任を果たすために自己を犠牲にしているということと、毒性を持った世界の邪悪さによって死に追いやられているということです。

I

サン＝テグジュペリの「声」(Voice) の使い方と子供の視点

このセクションでは王子さまの死の謎を解く前に、まず「星の王子さま」における「子供」の声がどのような機能を果たしているかという問いに答えたいと思います。James Higgins は *The Eye of Innocence* という論文の中で、この短い物語は子供の「ため」の本ではなく、子供に「ついて」書かれた大人のための本であると主張しています⁸。「星の王子さま」はいろいろな解釈が楽しめるため、大人の読者たちを何世代にも渡って惹きつけてきました。批評家たちは、この短い物語は、サン＝テグジュペリが「星の王子さま」より以前の本に書いてきたことが結晶化されたものであり、また自叙伝的な要素を含んでいるということに気づいています。この物語は、メタファー、アイロニー、哲学的な含蓄、文学的テーマに富んでおり、サン＝テグジュペリの他のすべての作品に見られる社会に対する批判が盛り込まれています。一例を挙げれば、芽が小さなうちに取り除くことを怠ってしまうと台地を貫き、最終的には惑星全体を破壊しかねないバオバブの木の逸話には、当時の世相に対する批判が込められていると解釈することができます。この逸話は、第二次世界大戦中にナチスに対して戦うことをためらっていた米国政府に対する作家の批判であるとも言われています。さらにこの逸話をより一般的な教訓としてとらえると、サン＝テグジュペリは、悪を根絶するためには人々が互いに協力し合い、近代社会の悪化してしまった道德基準を是正しなければならないと訴えているのです。

サン＝テグジュペリは自分が属する社会に対する批判を読者に理解させるために、「星の王子さま」の中で自らの視点を子供の視点と一致させています。子供たちは社会の悪に毒されていないため純粋無垢であり、社会の悪を見透かす澄んだ眼を持っているからです。従ってサン＝テグジュペリは、子供たちの視点を利用することによって「星の王子さま」の中で伝えたいことを読者が効率的に理解できるようにしているのです。そうするためにサン＝テグジュペリは、この本の冒頭から特別なレトリックを使用しています。この本はユダヤ人であるレオン・ウェルトに捧げられています。このユダヤ人の友達はサン＝テグジュペリよりもはるかに年上でした。しかしサン＝テグジュペリは、レオン・ウェルトが本を捧げるのにふ

⁸ Higgins, 23

さわしい人物であったと言っています。それは彼が貧しさに苦しみ、子供のために書かれた本でも理解することができ、自分が子供であったことを決して忘れない人物だからです。そしてサン＝テグジュペリは、彼の本をレオン・ウェルト自身ではなく、子供の頃のレオン・ウェルトに捧げるのだと言い直しています。ここでサン＝テグジュペリは、子供であることの重要性を強調しているのです。Higginsが定義した子供の“innocent eyes”（穢れのない瞳）を使うことは、人々が自らを貶めて二つの世界大戦まで引き起こしてしまった社会を批判するためにサン＝テグジュペリにとって必要なことだったのです。このことに関してHigginsは次のように言っています。

And he, the author, in order to tell the story that only a few pages later he will describe as an overpowering mystery, will be required to go down into the essence of his own childhood. Memory, especially of friends and of loved ones, is an absolute necessity for him; loving remembrance preserves and nourishes the clear-sightedness he requires not only for his writing, but also for summoning up the courage for moral behavior.⁹

(訳) そしてこの作家は、数ページ後に強力なミステリーとしてこの物語を語るために、自分の幼年時代にまで遡らなければなりません。記憶（特に、友人や愛する人々の思い出）はサン＝テグジュペリにとって絶対的に必要なものでした。愛情に満ちた思い出によって、執筆活動だけでなく、道徳的な行動をとるための勇気を奮い起こすためにサン＝テグジュペリが必要とする澄んだ視点を培い保つことができるのです。

Higginsは、サン＝テグジュペリが墮落した世界に住む読者に対して、道徳を取り戻すことを訴えようとしていると言っています。そうするためにサン＝テグジュペリは、Higginsが定義した「穢れのない瞳」を持った子供たちの視点を使用しているのです。

同様に、*Discovering the Royal Child Within – A Spiritual Psychology of The Little Prince* の中でEugen Drewermannは、キリスト教の文脈において、子供の視点を取り戻すことの必要性について言及しています。論点を明確にするために彼は、イエスが弟子に語った“Unless you turn and become like children, you will never enter the kingdom of heaven (「子供に戻って、子供のようにならない限り、天国に入ることはできません」)”という言葉を用いています(Mt. 18:3, cited by Drewermann)。虚栄心、偏狭、貪欲、嫉妬、尊大さのような悪に染まった世界に住んでいる大人は、決して再び小さなものには戻れないところまで来てしまっています。Drewermannは言います。

⁹ Higgins, 23.

From a religious standpoint ‘child’ is a code word for a life borne up by an imperturbable trust in the goodness of what lies behind or beneath the world. For this reason the “child” doesn’t need all the safeguards against anxiety that fundamentally form and deform the life of “grown-ups.”¹⁰

(訳) 宗教的 (注: キリスト教的) な見地から言えば, 「子供」ということばは, 世界の裏と根底に存在する善に対するゆるぎない信頼から生まれでた生に関するひとつの符号なのです。この理由から, 「大人」の生が根本的に作られたり壊されたりするような不安に対するいかなる予防手段も「子供」には必要ないのです。

神の御子であるイエスの様に「星の王子さま」の中のあの高貴な子供だけが, Drewermannの定義する “honest eyes (正直な目)” によって, 大人が簡単に染まってしまう社会の悪から善を識別することができるのです¹¹。HigginsとDrewermannは, 「星の王子さま」における子供の視点が絶対的な力で世の中の悪を厳密に裁くという機能を果たしているということを明確にしようとしています。

子供の声が, 無垢で, 正直で, 純粋で, 公平であるということを読者に納得させるためにサン＝テグジュペリは, 「語り」の力によって読者を導いていきます。「星の王子さま」の冒頭で, 飛行士・語り手は, 大人たちが完全に無垢であることを失い, 無垢な子供たちを嘲っているような世界にたった一人で住まなければならなかったことを後悔しているのだということを語っています。飛行士は子供の頃の記憶を取り戻しながら, 子供の頃の夢や希望が完全に打ち砕かれてしまったこと, 想像力を無理やり捨てられさせてしまったこと, 政治や, ゴルフ, ネクタイのことしか話せず星星や原始林の美しさを理解できないような大人たちとうまくやっていくことに難しさを感じていたことについて語っています¹²。Drewermannは「星の王子さま」のこの始まりを “This is a story that begins with a description of all the things that grown-ups can destroy in a child before its life has really begun. (この物語は, 子供の人生が実際に始まる前に大人たちが壊してしまえるという子供の中にある全てのものを述べることから始まっています。)” と表現しています¹³。語り手はかつては子供だったのですが, 人生が完全に始まる前に彼の未来は打ち砕かれてしまったのです。やはりここでも, 虐殺されたモーツアルトの逸話から読み取ることができるサン＝テグジュペリの考え方が反映されているのです。しかしサン＝テグジュペリは, 子供の頃に持っていた「穢れのない瞳」 (“innocent eyes”) を失うことはありません。また, 孤独な大人として大人の世界に生きることの辛さから逃れるために自己憐憫に陥っているわけでもないのです。Higginsはこう言っています:

¹⁰ Drewermann, 18

¹¹ Drewermann, 27

¹² Antoine de Saint-Exupéry, *Le Petit Prince* (Paris, Gallimard, 1946), 11

¹³ Drewermann, 21

It is rather the best method at his disposal to capture the child's innocent state of mind – the manner in which children look out upon the world that surrounds them, and inwardly to the secret world of themselves, and sometimes even beyond themselves to the world of mystery and wonder.¹⁴

(訳) これはむしろ、子供の純粋な心をとらえるためにサン＝テグジュペリが得意とする最善の方法なのです。子供たちはその純粋な心によって、自分たちを取り囲む外の世界と、自分の中にある秘密の世界を見ることができ、さらには時々、不思議と神秘の世界まで覗き込んでいるのです。

つまり語り手が、この物語では、子供の頃の記憶のエピソードが世の中を見通すために十分なほどに透き通った“child's innocent state of mind (子供の無垢な心)”が大切であるということを読者に対して強調するために使われているのです。そしてサン＝テグジュペリは、透明な視点をもった無垢な心の不思議な少年とサハラ砂漠で出会うための準備を読者に対してさせているのです。

飛行士の子供の頃の逸話の後に、「星の王子さま」の物語が始まります。「星の王子さま」では、王子さまと飛行士の両方が高貴で無垢な精神を持って空から来た(“*du ciel*”)人として描写されています¹⁵。二人は邪悪な大人たちのいる腐敗した社会から遠く離れたサハラ砂漠で出会います。工業化された現代の世の中では、砂漠で王子さまの大切な友人となったあの賢いきつねが王子さまに言った“*l'essentiel est invisible pour les yeux* (大事なものは、目で見ることができません)” (*Le Petit Prince*, 72) ということを知らず、所有することのできるものにしか価値を見出せない大人たちが無感覚に生活しています。砂漠という現実の世界から切り離された人の手の届かない土地で、遠くの星からやってきた王子さまと空から落ちた孤独な飛行士だけが、人間の住む世界の異様さに気付いています。しかしそれでも、大人の世界で長く生きてきた飛行士は王子さまと同じくらいに純粋であったわけではありません。飛行士は後に、“*Mais moi, malheureusement, je ne sais pas voir les moutons à travers les caisses. Je suis peut-être un peu comme les grandes personnes. J'ai dû vieillir* (しかし残念なことに、私は外側から箱の中の羊を見ることができません。私も少し大人に似ているようです。年をとってしまったようです。)” と告白しています¹⁶。穢れた大人の世界での彼の生活は少し長すぎました。彼は多かれ少なかれ、他の大人たちに同化してしまっています。そのために飛行士は、純真さを十分に取り戻して王子さまとの出会いに備えるために、孤立化した砂漠に不時着しなければならなかったのです。砂漠での飛行機の不時着には象徴的な意味があります。砂

¹⁴ Higgins, 24.

¹⁵ *Le Petit Prince*, 16

漠は、飛行士・作家であるサン＝テグジュペリ自身にとって特別な場所でした。実際にサン＝テグジュペリは一人で砂漠に駐屯した経験があり、俗世間から隔離された孤独な生活の中でヒューマニストとしての精神性を培うことができたのでした。Higginsはこう言っています:

Saint-Exupéry's life of solitude in the desert afforded him a great deal of time for contemplation, which finds its way into all of his writings; and no less here, in this fairy tale. From the vantage point of the Sahara, he could look back at the industrialized world from which he had come and see clearly that it was racing away from the simple truths so basic to the welfare of mankind - so basic, so universal, that they are experienced and accepted in childhood as well as remembered and understood by some few grown-ups.¹⁷

(訳) 砂漠での孤独な生活によってサン＝テグジュペリは、とても長い間思索に耽ることができました。そして彼は、自分の執筆の方法を見つけたのです。もちろん、このおとぎばなしにもその方法が使われています。サハラでの優越的な視点から、サン＝テグジュペリがかつて住んでいた工業化社会を振り返ることができました。そして、その工業化社会は人々の幸福にとってもっとも基本的であり、普遍的で単純な真実からはるかに遠ざかってしまっているということ、そしてその真実は、子供時代に経験し受け入れているということ、また小数の大人たちだけがそれを記憶して理解しているということがはっきりと分かったのです。

砂漠は、「星の王子さま」の飛行士と同様、サン＝テグジュペリ自身にとっても子供の純粋な目を取戻すために必要な場所なのです。

サン＝テグジュペリにとって砂漠が特別な意味を持っているのと同様に、飛行機にもまた重要な意味があります。「星の王子さま」においては、飛行機の墜落は純粋な目を取り戻すための手段となっています。全体的にサン＝テグジュペリのテキストにおいては、飛行機は未来へ進んでいくことの象徴となっています。従って、飛行機が地上に下りることは時間の停止を意味するのです。この象徴的な解釈の良い例が1927年に出版されたサン＝テグジュペリの最初の小説である「南方郵便局」(*Courrier Sud*)に顕著に表れています。「星の王子さま」と同様「南方郵便局」においても、主人公が現在の生活と過去の記憶を行ったり来たりするという方法が使われています。この小説は、ルイーズ・ド・ヴィルモランというサン＝テグジュペリの婚約者とサン＝テグジュペリとの別離という挫折的な経験の四年後に書かれています。その別離から長い月日が過ぎているにもかかわらず、サン＝テグジュペリはルイーズに対する執着心を捨てきれずにいました。この経験を元にサン＝テグジュペリは、彼の内的

¹⁶ *Le Petit Prince*, 21

¹⁷ Higgins, 35

自己をこの小説に投影しています。A *Symbolic Interpretation of 'Courrier Sud'* の中で M. Parry は次のように書いています。

The fundamental lack of harmony between himself and the outside world led Saint-Exupéry to question life in general, to seek a meaning for his existence beyond his immediate environment, in the wider universe. This preoccupation is reflected in *Courrier Sud* which is perhaps the most personal and philosophical of his fictional works.¹⁸

(訳) 自分自身と外界の間の調和が基本的に欠落していたため、サン＝テグジュペリは一般的に生というものに対する疑問を抱いていました。またそれによって、自分の身近な環境の中だけでなく、より広範な宇宙の中における自己の存在意義を探るようになったのです。このようなサン＝テグジュペリの関心事は「南方郵便局」に反映されており、この作品は、サン＝テグジュペリの創作作品の中でもおそらく最も私的で哲学的なものであるといえます。

人生そのものに疑問を感じること (“Questioning life in general”) と自分の存在 (“his existence”) への疑いが起因して、サン＝テグジュペリは内的自己をベルニスという内省的な主人公に投影させているのです。

ベルニスというこの小説の主人公は自らの存在意義を探し求めてもがき、さ迷いながら生きる男として描かれています。飛行機の操縦士であるベルニスは、決して見通すことも追いつくこともできない未来に向かって常に旅をしています。M. Parry 以下のように言っています。

After each landing, when the world of his past is temporarily restored to him, the pilot is anxious to depart again, as thought impelled ever onwards to some obscure goal; for Bernis's vocation is associated with such vague notions as a promise which must be sought out, for it is instinctively felt to be the fount of happiness.¹⁹

(訳) 地上に降り立つたびにベルニスは、自分の過去の世界を一時的に取り戻すのですが、はっきりとはしない目的に向かってつき動かされるように再び旅立ちたくなるのです。なぜならベルニスの仕事は、探しあてなければならぬ約束というような漠然とした概念と結びついており、その目的地が幸福の源泉であるとベルニスは本能的に感じているのです。

¹⁸ Parry, M, A *Symbolic Interpretation of 'Courrier Sud'*, (Modern Language Review, Scotland, vol. 69, 1974), 297.

¹⁹ Parry, M, 301

しかしベルニスは、決してその漠然とした目的地 (“obscure goal”) に到着することも幸福の源泉 (“the fount of happiness”) を見つけることもできないのです。彼は自らの居場所を見つけようとして、安定と、彼の過去を完全に取り戻す (“restore”) ことを絶望的に望んでいます。そして彼は、自分を地上につなぎとめてくれる強い重力のような何かを探し当てます。それは、地上で彼を待ち続けているこの小説のヒロインであるジュヌビエーブなのです。

ベルニスは幼馴染であるジュヌビエーブを子供の頃から愛していました。彼はこの女性が既に結婚してしまっているにもかかわらず、彼の救世主となってくれることを説に願っているのですが、それはジュヌビエーブが “satisfies the compensatory need to belong, whose power is to provide the gravitational pull which momentarily restores him to the centre of his axis and reunites him...” (何かに所属したいという保障的な欲求を満たしてくれ、ベルニスにしばらくの間、自分の中の核を取り戻させ、自分を再統合させるような引力を提供してくれる)”からです²⁰。ベルニスはジュヌビエーブの生を吸収し、自分の生と安定を取り戻そうとして彼女を夫のもとから奪い、駆け落ちをします。

しかしこの小説では、主人公は彼の過去も生も安定も取り戻すことはず、ベルニスとジュヌビエーブの駆け落ちは失敗に終わります。現実の生活から逃亡した結果として、二人とも物語の中で死んでしまいます。ジュヌビエーブは病に冒され、彼女の夫の家で死に、ベルニスは仕事の最中に砂漠に墜落し、砂漠の原住民たちに殺され、そしてついに死という永遠の中に自らの居場所を見つけるのです。

こうして、南方郵便局の中でサン＝テグジュペリの読者たちは、飛行機が未来への推進のシンボルであり、その着陸は過去へ戻ることを表現していることが理解できます。この力学は「星の王子さま」にも適応することができ、この物語の中では、飛行機の墜落は飛行士が過去に持っていた純粋さを取り戻すための手段となっています。したがって、「星の王子さま」の飛行士は、砂漠に墜落することによって純粋な目を持った高貴な少年との出会いと交流のための準備をしているのです。そして、純粋な目を持った飛行士と星の王子さまとの会話を通して、また飛行士の語りを通して、「星の王子さま」の読者たちはサン＝テグジュペリがこの短い物語の中で暗に批判していることを効果的に理解できるのです。そして、この作家の批判的な目はこのテキスト全体を通して見ることができます。

〈つづく〉

(まやなぎ まみ 本学非常勤講師)

²⁰ Parry, M, 301